

## 2022年度口語詩句賞について

西躰かずよし

今回、最も印象深かったのは全体の作品における水準の高さである。特に、高校生と大学生の作品の水準の向上については飛躍的なものがあり少なからず驚いた。もとよりこの賞は、口語詩句投稿サイトに投稿し、いずれかの選者の選を通過した（佳作選考された）作品から10作品を選んで応募がなされるところから、応募資格を有する段階で一定の実力を有する書き手ということができる。

ただ学生の場合、例年、口語詩句賞の応募と口語詩句奨学生の応募時期が重なっていたこともあり、その両方に応募しようとすれば、作品の重複が認められていないことから、佳作選考された作品を20作品準備する必要があった。こうした事情もあるだろう。従来は、応募された10作品を連作として考えるとバランスが良くないものがあったり、学生が奨学生への応募を優先したりしたことから、魅力ある作品の提出が限られる傾向があった。しかし今回は、それらの応募時期がずれたことが幸いし、応募された作品はどれも水準が高く、甲乙つけがたいものとなった。

特に注目したのは、「立花ばとん」と「長谷川柊香」の作品であった。「立花ばとん」は、世界の隙間を描こうとする。従来の枠を超えたリアルを表現しようとしているそうした姿勢に共感したし、新たな表現方法を模索しているといった点からも、この賞を受賞するにふさわしいように感じた。次に「長谷川柊香」。彼は自身の呟きをとおして沈黙を描く。作品のなかに垣間見える暗さと、それに比例するかのような沈黙の深さに惹かれた。最終どちらを一番に推すか悩んだが、書くことの痛みに近づこうとする試みに惹かれて「長谷川柊香」の作品を一番に推した。

そのほかでは「山本先生」、「小野寺 里穂」、「こはくいいろ」に注目した。「山本先生」の作品は、口語の良さを活かしているという点や、俳句としての完成度の高さといった点が素晴らしい。惜しくも入賞を逃した「小野寺 里穂」であるが、完成度のバラツキが気にはなったものの、切り詰めた表現と作品から伝わる危機意識に惹かれた。また「こはくいいろ」の作品に見られるまっすぐな表現と、描かれるみずみずしいイメージは他にはないもので、これからが期待される書き手のように感じた。

私が推した応募者が入賞されなかった場合もあるし、推さなかった応募者で入賞された方もいる。それは、ジャンルの異なる作品を評価するという困難さから来る選のバラツキの可能性を完全に否定するものではないが、これまで選をさせていただいた経験から言えば、今回ほど、甲乙つけがたい作品が並んだことはなかった。受賞された方は当然喜んでいただければと思うが、受賞されなかった方も賞の結果に一喜一憂するのではなく、書き続けていってほしい。

何故書くのか。人によって理由は様々だろう。ただ、それを考えると、石牟礼道子が永野三智に言った『悶え加勢すれば良かとです』ということばを私は思い出す。『むかし水俣ではよくありました。苦しんでいる人がいるときに、その人の家の前を行ったり来たり。ただ一緒に苦しむだけで、その人はすこおし楽になる。』という意味のことば。それぞれに書く理由があるとしても、書くという本質は『悶え加勢する（それは自身に対してでもいいし、他者に対してでもいい。）』というところにつながっていくのではないか。そして「その人がすこおし楽になる」という点において、書くことの意味は決して失われることはないと思う。私は、応募された皆さんに、これからも書きつづけていかれることを思う。

最後になったが、すばらしいと思った作品のいくつかを紹介し、2022年度口語詩句賞の総評のおわりとした。

七月のそれは大事なメロンパン

中矢 溫

私の肌の中

眠る貝殻よ

こはくいろ

かかとから私が消えてゆく浜辺

こはくいろ

虫の夜弟も銀河に加わりて

田崎森太

赤ちゃんの口から夏の風ふわり

宮本 浩

とりあえずおでんから始まる電話

山本先生

紅葉する森の中

水溜りに

油膜が浮いていて

秋

の面積

立花ばとん

ホルンの曲線

ぼくは立ち上がる

立花ばとん

とかげのしっぽ  
ほしい  
わたしがいなくなったら  
かわりに  
てをふつといてほしい

永山 逢海

とおい雪 ふれるための儀式 小野寺 里穂

手の  
はなびらを  
風の中に  
もどす

長谷川柊香

さえずりは  
ひかりのみずを注ぐように

長谷川柊香

雨後の森  
すこし  
暗くて  
母胎めく

長谷川柊香